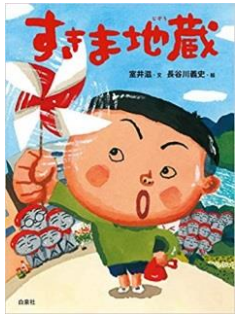


わくわく

12月号

本だな

1 2 3 年



E 『すきま地蔵』

えほん

室井滋／文 長谷川義史／絵 白泉社

かさじぞうの子孫として、町の人をたすけてきたおじぞうさん一家。町のたてものがふえて、ビルのすきまから出られなくなりました。学校の帰り道、ボクはおじぞうさん一家によびとめられ、「かわりに町をみまわってほしい」とたのまれました。

K973 『カテリネッタとおにのフライパン』

ものがたり

イタリアのおいしい話』

剣持弘子／訳・再話 剣持晶子／絵 こぐま社

カテリネッタは、おにからフライパンをかりました。ところが、おれいにとどけるはずだったドーナツをぜんぶ食べてしまいます。こまったカテリネッタは、フライパンに馬のふんを入れてかえずことにしました。



K913 『ねこの町の本屋さん ゆうやけ図書館のなぞ』

ものがたり

小手鞠るい／作 くまあやこ／絵 講談社

クララさんは、ねこの町で子どものための本屋さんをひらきました。でも、おきやくさんがこなくて、しょんぼり。

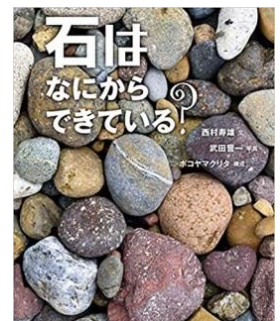
犬の村にあるゆうやけ図書館では、子どもたちが本にむちゅうだときいて、たずねてみることにします。

K458 『石はなにからできている？』

ちしきのほん

西村寿雄／文 武田晋一／写真 岩崎書店

火山のマグマがひえると、白や黒、赤などのキラキラしたつぶが光って見える石になります。川から流れてきた砂は、海のそこにつもると、ざらざらした、しまもようの石になります。色や手ざわりのちがいから、石がどのようにして生まれたのかわかります。

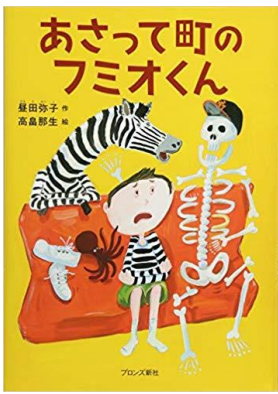


わ く わ く

12月号

本 だ な

4 5 6 年



物語

K913 『 あさって町のフミオくん 』

昼田弥子／作 高島那生／絵 ブロンズ新社

フミオは、公園でシマウマに出会いました。白と黒のよこじまもようの服を着ていたので、シマウマの子ども〈シマオ〉にまちがえられ、家につれていかれます。

すきをみてにげだしますが、今度はウシの子ども〈ウシオ〉とまちがえられてしまいます。ウシと話しているうちに、フミオは自分がだれなのかわからなくなってきました。

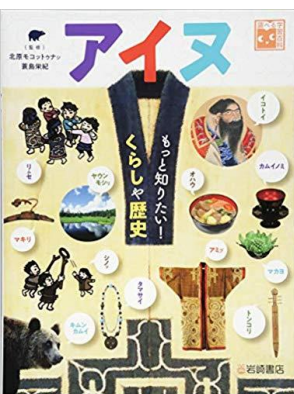
K913 『 冒険は月曜の朝 』

荒木せいお／作 タムラフキコ／絵 新日本出版社

学校が代休の月曜日。6年生の風花は、鉄道好きのクラスメイト・賛晴と、小淵沢行きの列車に乗りました。

旅の目的は、風花のおばさんを応援するために会いに行くこと。おばさんは結婚せずに赤ちゃんを産んだばかりなのです。親にだまって家を出てきた二人は、平日に子どもだけでいてもあやしまれないように、兄妹のふりをします。

物語



ちしきの本

K382 『 アイヌ もっと知りたい! 暮らしや歴史 』

北原モコトウナシ／監修 蓑島栄紀／監修 岩崎書店

日本に住んでいるのは、日本人だけではありません。北海道や樺太、千島列島などには、昔からアイヌ民族が住んでいます。そのアイヌには、ししゅうのある着物や日本語とはちがうひびきの言葉など、独自の文化があります。

かわいた広い川という意味のサッポロペツに漢字をあてはめた札幌など、アイヌ語が元になった地名は今も残っています。